

表紙によせて

## アオキ *Aucuba japonica* Thunberg

絵:角田 葉子(2008年2月)

光沢のある濃緑色の葉に鮮やかな黄斑が入り、冬には赤い実までも観賞の対象となるアオキは、各地に野生する日本特産の植物であるが、詳しくいうと、本州以南の太平洋側に自生する比較的大型のものがアオキで、北海道から本州にかけての日本海側の積雪の多い地帯にみられる、葉も株もやや小型のものは変種のヒメアオキ *A. japonica* var. *borealis* として区別される。属名の *Aucuba* は濃緑葉と茎まで数年間は緑色を保つことからの日本名の語源とされる「青木葉」に由来し、ヒメアオキの変種名の *borealis* は「北方産の」というような意味である。アオキは雌雄異株で、裏表紙のように雄しべが退化した雌花をつける雌株と、逆に雌しべが退化した雄花だけをつける雄株があるので、雌株でないと果実はつけない。花は派手ではないのであまり意識されないが、3月から5月にかけて咲き、実が赤く熟すのは秋から冬にかけてであり、冬の食料としてヒヨドリなどに食べられなければ5月頃まで枝についている。

日本のアオキがイギリスではじめて育てられたのはジョン・グレーファーが 1783 年に日本から導入したものといわれ、カーチスの「ボタニカル・マガジン」(1809)には雌花をつけた斑入り葉の図が載せられている。しかし、雄株が導入されなかったために受粉できず、その後も久しく赤い実をつけることはなかったらしい。

高名なプラントハンターであるロバート・フォーチュンは 1860 年に日本を訪れているが、日本の植物探索の主目的のひとつが、アオキの雄株を手に入れることだったといわれる。フォーチュンは横浜で見つけた葉に斑の入らない雄株をイギリスに送り、1864 年には赤い実をつけたアオキがはじめてケンジントンで展示された。この実をつけたアオキはイギリス内でちょっとしたセンセーションを巻き起こし、「ガードナーズ・クロニクル」誌で賞賛され、展示会で数々の賞が与えられ、さらに実を付けた株や雄株が高値で取引されたといわれる。1890 年代まではこの人気は続いたが、アオキはさし木や実生で簡単に殖やすことが出来たので、その後は広く普及し、1910 年代にはどこでも見ることのできるありふれた園芸植物になったらしい。

(箱田直紀)